

センターからのお知らせ

まちづくりや京町家に関する相談を受け付けています。
センターでは、まちづくり活動の進め方や、京町家の保全・改修についてのご相談などに、
アドバイスや情報の提供を行っています。お悩みの方は、まず、ご相談ください。

センター出版物

6月の新刊

京町家の再生

Machiya Revival in Kyoto

¥1,575 (定価)

京町家は日本の伝統的住宅で、自然環境と共生しながら、すぐれた建築の造形美を誇るウルトラモダンな

建築である。失われていく京町家。その素晴らしさを伝えるとともに、現状の姿、行政・企業・住民が一体となって取り組む「再生」への試みを紹介。対英訳付。



西陣と町家の魅力紹介

京都で「町家」なワケ

—西陣めぐり&公開トークセッション—

¥500 (頒価)

2008年秋、元西陣小学校の空き教室を貸していただき、センターの出張所「まちセン・インフォメーション・サテライト・オフィス」MISOプロジェクトを実施しました。「まち歩き」をして西陣のまちを体感し、「公開トークセッション」で町家暮らしの魅力を発見したイベントなど3カ月間のプロジェクトと感謝をまとめた1冊。

各種セミナーのご案内

※お申込み、お問い合わせはセンターまで

京のまちづくり史セミナー

14時～16時

- ・7月18日(土)…京の水とまちづくり① 住みなしと地域資源活用のまちづくり
講師：高橋 康夫氏 (京都大学教授)
- ・9月5日(土)…京の水とまちづくり② 近世期のまちづくりから見る都市と水の関係
講師：日向 進氏 (京都工芸繊維大学教授)
- ・10月3日(土)…京の水とまちづくり③ 近代期の都市づくり・都市戦略から学ぶ
講師：小林 丈広氏 (京都歴史資料館主任)

まちづくり実践塾

14時～16時

※8月8日は15時～17時

- ・7月26日(日)…家に眠った写真を集めて「まちの記憶」を呼び起こそう
講師：中村 伸之氏 (南ランドデザイン)
- ・8月8日(土)…地域に密着した商店街とまちづくりの接点
講師：上田 照雄氏 (京都三条会商店街振興組合理事長)
中川 敏逸氏 (ラクセーヌ商店会会長)
- ・9月12日(土)…地域への愛着を育む「まちマナビ」の事例
講師：岡藤 茂吏氏 (紫野教育後援会)

京町家再生セミナー

- ・8月2日(日)…「きみちだけの オリジナル鐘馗さんをつくろう！」 13時30分～16時
講師：光本 大助氏 (光本瓦店(南) 代表取締役)
- ・9月26日(土)…「木のある暮らしを学ぶ～銘木に触れてみよう!～」 14時～17時
講師：吉村 栄二氏 (南松文商店 代表取締役)

こどもセミナー'09 「京都のまち博士になろう!～お話し会&まち歩き連続講座～」

(定員：親子20組)

- ・8月1日(土)…前編「お話し会」14時～16時
語り部：乾 亨氏 (立命館大学教授)
- ・8月8日(土)…後編「まち歩き」13時～16時

センター活動拠点のご案内

京都市景観・まちづくりセンター

〒600-8127 京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83番地の1 (河原町五条下る東側)

「ひと・まち交流館 京都」地下1階

TEL 075-354-8701

FAX 075-354-8704

e-mail : machi.info@hitomachi-kyoto.jp

HP : http://machi.hitomachi-kyoto.jp

●開館日 (相談の受付等)

9:00～21:30 (月曜日～土曜日)
9:00～17:00 (日曜日・祝日)

●休館日

毎月第3火曜日 (国民の祝日に当たるときは翌日)
年末年始 (12月29日～1月4日)

なお、センターへのお越しの際は公共交通機関をご利用ください。



第1回まちづくり川柳

若葉の萌える皐月某日、ひそやかに第1回まちづくり川柳大会が行われたのである。その結果は如何に…!?

《天賞》

こどもから 年寄りみんなで つくるまち

R・Fさん

《優秀賞》

人・まちも 違いが個性 まちづくり

H・Fさん

《佳作》

何してる 問われて見せる 青腕章 京町家調査子

ほっほほ。京町家まちづくり調査も知らない人から見ただけの怪しい人ってことじゃのう。



今回応募頂いた他の句についてはHPで紹介していますので、是非ご覧ください。
http://machi.hitomachi-kyoto.jp/koneta/index_koneta.html
素敵なまちづくり川柳を思いついた方はセンターまでお知らせください♪



詳細は8頁をご覧ください。



京まち工房



SUMMER
情報交流誌

no.

47

(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

特集

元気に伸びゆくまちづくりの姿を見つけました



特集

まちセン深草探検団 数珠つなぎ企画
深草の「まち」の姿のいま・むかし

新連載

第1回あちらこちらに「まちの縁側」
(財)まちの縁側クニハウス&まちの学び舎ハルハウスへChange!

堀川に水が戻るまでのまちづくりの軌跡(前編)

地域社会でのマンションとの共生

マンション事業者を巻き込み連携したお町内のまちづくり

地域の情報共有・情報発信をお手伝いします。
～地域のホームページ運営支援～

「まちかどアルバムパネル展」を開催しました

「京の町名とその由来展」

寄稿

「DO YOU KYOTO?—千年の持続都市・京都—」
のまちづくり

他都市における景観・まちづくり事例

—札幌軟石がつくるまちの風景—

京町家まちづくりバナナの販売について

「京町家まちづくりファンド」募金箱ワークショップを開催!

京町家まちづくりファンドの進捗状況

京町家保全・再生の事例

鉦適含うさき塾—西陣町家工房—

景都(Kate)のつづやき

寄稿

私と京都「私と京を繋ぐ町家」

新連載

第1回 ふっきーの徒然なるままに
「自然との共生—ミツバチに学ぶ—」



原画提供 寺本健三氏

まちセン深草探険団 数珠つなぎ企画 深草の「まち」の姿のいま・むかし



Ⅰ 深草探険団とは!?

昨年度は、深草地域の方々に京町家まちづくり調査でご協力いただき、深草文化交流に設置されたセンターのブースでお話をいただき、お世話になりました。

そこで今年度は、センター有志で深草探険団と称し、深草地域の方々に数珠つなぎでお話を伺い、深草のまちの魅力を知り、発信していく取組を始めました。

今回は、藤森学区市政協力委員連絡協議会会長の田中震治さん、藤森神社の宮司の藤森信正さんにお話をお聞きました。

この企画では、深草支所まちづくり推進課の中谷香課長にお世話になりました。

Ⅱ 深草のまちの移り変わりと思い出*藤森氏提供資料から作成 縄文時代～明治まで：歴史豊かなまち

深草の歴史は古く縄文時代にまで遡ることができます。深草学区の東南部の谷口町、深草学区と砂川学区にまたがる西浦町付近では縄文式土器片や石器が発掘され、西浦町から砂川学区の平田町付近には、深草弥生遺跡があり、稲作集落の遺跡が確認されています。

また、深草地域の東側の丘陵地帯には、番神山古墳、ケンカ山古墳など多くの古墳があり、推古天皇の時代に深草地倉と呼ばれ、朝廷経済の地方拠点になり、深草里、飯食里、松本里などで紀伊郡深草と呼ばれていました。

平安時代になると、藤原氏一門の荘園となり、天皇の御陵や貴族の埋葬地ともなりました。以降、多くの山荘別邸や大寺院が建立されていきました。しかし、応仁の乱では深草も戦乱に巻き込まれ、これらの多くが消失してしまいました。

明治時代以降：静かなまちは軍隊のまちへ

田園地帯が広がる深草のまちでしたが、明治31年には、現在の京都教育大学の場所に歩兵九連隊ができ、明治40年には第16師団が設置され、現在の聖母学園の場所に司令部が置かれました。この第16師団は昭和20年まであり、静かな深草のまちは軍隊のまちになっていきました。

また大正11年には紀伊郡深草町になり、昭和6年には京都市に編入され伏見区の一部となりました。

終戦後：軍隊のまちは教育のまちへ

終戦後、まちは一変しました。軍隊施設の跡地は払い下げられ、大学などの教育施設や、公営住宅になりました。それに伴い、例えば校校や下士官の宿舎は学生の下宿となり、軍服屋は洋服屋になるなど、商売も変化をしていきました。また農家も兼業が増え、農地は宅地へと開発されていきました。

現在の深草支所管内は、2万9130世帯、6万2910人(H17国勢調査)が暮らすまちとなっています。そして砂川、稲荷、深草、藤森、藤城の5つの学区で住民自治が行われています。

■深草のまち



Ⅰ 戦時中の思い出

- 民間人は食糧難で配給を受けていましたが、まちの缶詰工場では軍隊用に竹の子の缶詰を作っていました。少年時代は、それを横目に見ながらうらやましく思っていました。
- 中学時代に銃を抱えて奈良まで夜行訓練にも行きました。

Ⅱ 終戦直後の思い出

- 仕事でGHQの宿泊所に行った時の話です。扉の向こうに胴体だけ隠れて頭とひざ下が見えたので、思わず扉の上から覗くと、新聞を読んでいる外人さんと目が合いました。これが洋式トイレを見た初体験でした。
- 藤森神社の神輿の飾りが無くなる事件がありました。GHQに申し入れるとすべて戻ってきました。本国へのお土産にしたかったのでしょうか。

Ⅲ 深草から見た京都と伏見

- 今の若者は「四条へいく」、「大手筋へいく」でしょうけれど。昔は「京へ行く」、「伏見に行く」と言っていました。

Ⅳ 取組紹介…深草を語り継ぐ会

「深草に歴史はありませんよ」という住人も多く、もっと深草に歴史があることを知ってもらいたいと思いました。深草の歴史を学び伝えることを目的に、平成14年の3月から活動しています。平成19年には『創祀千八百年 藤森神社』を作りました。

Ⅰ まちをつなげる藤森神社

個々の町内や学区での住民同士のつながりに加え、深草のまちでは、まち全体でのつながりもあるのだとか。その核となるのが藤森神社です。藤森神社の氏子地域は東山、伏見も合わせた約9学区。特に深草のまちは5学区すべてが氏子地域となっているそうです。

そのつながりが浮かび上がるのが、5月の藤森祭です。『創祀千八百年 藤森神社』によると、深草のまちには、お祭りを支える「当町組織」が存在するそうです。その年に当てられた「当町組織」が氏子地域を神輿巡行する神幸祭や、神役行列の人や資金の調達などを取り仕切っていたそうです。昭和30年代の「当町組織」は、下記の3つの郷ごとに分かれており、現在でも神幸祭では各郷の神輿巡行をおこなっています。また4つある神役行列は、現在では学区ごとの分担となり、学区内の複数のお町内で「当町」を担っています。お町内では6～10年に一度の頻度で回ってくるそうです。

- ◆宮本下之郷(藤森、深草、住吉、桃山の各学区内の南部、中組、久宝寺、谷口、桃山及び伏見の組織)
- ◆深草郷(稲荷、深草、砂川、藤森、住吉の各学区内の上八丁、中の郷、下町、本郷及び加賀屋敷町の組織)
- ◆東福寺郷(一橋、月輪の各学区内の本町十一丁目から二十二丁目までと福稲を合わせた組織)

泣き笑いの藤森神社

「別れた最後がここでした」「この神社で祈ったおかげで元気でいます」と参拝者に昔のお話いただくこともあるのだとか。入隊、出征、無言の帰宅…。藤森神社は家族との別れや再会の泣き笑いの場所になりました。



神役行列の様子
『創祀千八百年 藤森神社』より

Ⅰ 深草のまちの現在とまちづくり

時代ごとのさまざまな顔と魅力をもつ深草地域。地域の魅力を発信しまちづくりにつなげようとする取組をご紹介します。

地域発、深草の魅力いっぱいの「深草トレイル」!

平成20年7月に有志の方々が集まり深草トレイル整備事業実行委員会が発足。落ち着いた昔ながらの町並みと豊かな自然の共存する深草の地域資源を再発掘し、まちなかに案内板や道標を設置したほか、散策マップを完成させました。

鮮やかなイラストは、伏見工業高校の産業デザイン科の生徒さんによるものだそうです。

北は伏見稲荷駅から南は藤森駅まで、魅力あふれる散策コースがわかりやすくガイドされています。

「深草トレイル」マップを片手に、地域の魅力を体感してみませんか?



区役所・支所などで配布中です。

竹林を再生させ、深草の魅力を伝えよう!

NPO法人 京都・深草ふれあい隊 竹と緑

深草地域は古来より竹やぶが多く、たけのこも地域の特産品のひとつです。しかし、農家の後継者不足や竹林整備に手間ひまのかかることから、近年竹林が荒廃しつつありました。

竹と緑さんでは、こうした竹林の整備に取り組んでいます。良質なたけのこを育てるだけでなく、深草らしい景観の保全、地域の活性化につながっています。

現在、36名のメンバーが中心となり、竹林整備のほか竹の活用・普及のための様々な取り組みをされています。(※8頁でもご紹介しています)



〒612-0889 京都市伏見区深草直達橋2-435
電話：090-2359-1155 FAX：075-204-8174
メール：taketomidori@maia.eonet.ne.jp



京都・深草ふれあい隊竹と緑の皆さん

(大屋 みのり、田中 志敬)



誰もが立ち寄れる場、気軽に交流できる場、このような場所がまちの中にぽつぽつと出てきています。私たちはこれを「まちの縁側」と呼び、地域コミュニティの新しい形として注目しています。

センターでは、これまでもシンポジウムやニュースレターで、「まちの縁側」の活動を紹介してきましたが、今回、連載記事として、それぞれのまちの縁側主人に活動の紹介をしていただくことにしました。第1回は、名古屋で「クニハウス」、京都市北区で「ハルハウス」を主宰し、一般財団法人化も実現された丹羽國子さんの登場です。「まちの縁側」という言葉は「クニハウス」から発したものです。

(財)まちの縁側クニハウス& まちの学び舎ハルハウスへChange !!

代表理事：丹羽 國子

名古屋で1999年、ボランティアの学生の方(鈴木研究室所属)が、



誰もが集えるハルハウス

旧宅をユニバーサルデザインで改築して下さり、ボランティア仲間と「クニハウス」、京都で2003年「ハルハウス」を開いて、来る人拒まず、去る人追わず、で集い合っています。週5日間、10～16時まで年1回のクリスマス会のほか、スケジュールは何も

ありません。乳幼児からエルダーズまで、誰かと話したくなったら、ふらっと来て語らい、生活の智慧を分かち合い、再会の喜びや世代間交流を深めています。「まちの縁側・まちの学び舎」で、笑いのたえない喜びと健康を頂いているのは当番のボランティア自身である、と実感する日々です。日本のエルダーズの孤立死や老老介護と大難儀時代にあって、元気でいる有り難さに感謝しています。1エルダーとして、社会に蒔いた種が因果応報に育った結果である、と反省します。省察の一つは、先祖から受け継いできた健康の礎である「躰のメカニズム」を育む暮らし方を軽視し、事後医療・事後福祉システムの日本にしたこと。二つは、多くの大人が自由と放任を混同し、多くの周りの先輩と親は、後輩に公序良俗の基であるT. P. O(時・場所・目的)に応じた行動を教えず、社会の福祉化を軽視してきたことです。

地域に美田を遺して共生きシステムのまちづくり! 昨年12月の新法に基づき「一般財団法人まちの縁側クニハウス&まちの学び舎ハルハウス」へボランティア仲間とChangeしました。これまで通り、ボランティア当番での「ほっとする居場所」活動と、新たにホームページでの「クニさんのICF」コーナーの発信に加えて、「まちの学び舎ハルハウス」は、世界からのご厚志と私費で今年中にリニューアルし、国際交流を含めた多目的福祉施設へChange中です!!

ふらっと両施設へお越しくださいませ。スタッフ一同、心よりお待ちいたしております。

そう言えば祇園祭に行った事がないわ。



堀川に水が戻るまでの まちづくりの軌跡 (前編)

平成21年3月29日、半世紀ぶりに堀川に水が戻った。その背景には、堀川通りに面する23学区と京都堀川ライオンズクラブの20年以上の地道なまちづくり活動があった。このまちづくりの様子について、活動を精力的に取り組まれてきた西陣地域住民福祉協議会の吉川哲雄会長にお話を伺った。

堀川に水を通す大事業の立役者である「堀川と堀川通りを美しくする会」は、昭和60年に地域と京都堀川ライオンズクラブとで発会し、当初は堀川通りのゴミ拾いを目的としていた。当時も市民団体の提言の中で、堀川に水を戻すということには触れられていたそうだが、「あの時は、堀川に水を戻すなんてこと全然考えてなかったわ。」とのこと。

転機は平成6年、オレゴン大学教授との出会いだった。「街の真ん中に枯れた川があることをおかしいと思わないのか?」と、堀川を親水公園にするプランを提案してくれたそうだ。「あれを見た時、感動して「やろう」という気になったんや。」

そう思った翌々年、その内容を地域住民に向けて発表し、賛同者が増えていき大きな運動に発展していった。

平成10年、行政を巻き込むにあたり、住民の意見を集約する要望を作った。その中で吉川会長は、「町並み保全や観光のためだけでなく、「防火用水」としても必要である」という一文を書いていた。「町家がたくさん残る京都にとって、重要な防火対策になる」と考えたそうだが、このような幅広い視野があったからこそ、多様な層にとって身近な地域資源になっていったのではないだろうか。

その後、桜祭りや灯ろうまつりをはじめとするイベントで、堀川と地域住民が向き合うきっかけづくりの取組を定期的に行ってきた。桜祭りに、京都堀川ライオンズクラブの力援えによって桜が植えられ、現在では堀川通りを美しく彩っている。また、灯ろうまつりでは、灯ろうづくりを通じてまちづくりの機運が高まった学区もあったそうだ。

このように最初の約10年の「気づき」「起こり」「機運作り」が、周辺住人を巻き込んだまちづくりの土台を築いたといえよう。(木下 良枝)



実際に水を流したイベント



学区を越えて灯ろうまつりを行った

(次号に続く)

地域社会でのマンションとの共生

マンション事業者を巻き込み連携したお町内のまちづくり ～中京区本能学区元本能寺町の取組～

小川通りに面し、南北を蛸薬師通りと六角通りにはさまれた元本能寺町は、その町名にあるように、本能寺の変で焼け落ちた元々の本能寺があったとされる歴史豊かなお町内です。今回は、このお町内ではじまったマンション事業者と連携したまちづくりの取組を紹介します。

当初、お町内にワンルームマンションが建設されることになり、そのマンションを所有する事業者との間で工事協定と管理協定が結ばれていました。ところが建設途中で所有者が別の事業者になり、用途も賃貸マンションからウィークリーマンションへ変更され、再度、新たな事業者と交渉することになりました。

しかし、お町内では、事業者からの変更連絡が遅れたこと、短期滞在型のウィークリーマンションでは不特定多数の人が出入りして、静かで暮らし良いお町内の環境が脅かされる不安から、事業者への不信感が募り、両者の交渉は一進一退で平行線をたどっていました。

もちろん、お町内の本音は事業者との対立を望んでいるわけではありませんでした。「マンションにとっても立地する地域が魅力的なことは望ましいはず。マンションの事業者とも一緒にお町内での暮らしを考えていきたい」との思いを持っていました。そこで、センターも参加させていた組長の方々の議論の中で「まず事業者にお町内の歴史や特徴を知っていただき、今後一緒にどのようなお町内にしていきたいのかという思いを事業者と共有しよう」という方向性が定まりました。

この思いを社長に直接伝えることで、事業者の協力も得ることができました。お町内で作成した「元本能寺町の町づくりにご協力ください」という歴史や特徴を伝える案内文をマンションの掲示板に掲げるようになったほか、お町内と事業者の連絡の場も設けることになりました。このように、元本能寺町では事業者への不信感から生じた対立を乗り越え、お町内の良い環境を維持するために居住者と事業者の連携が始まりました。

センターでは、マンション住民やマンション事業者と一緒にあったお町内や学区のまちづくりのサポートを行っています。まずはお気軽にご相談ください。(田中 志敬)



お町内の案内文

地域の情報共有・情報発信をお手伝いします。

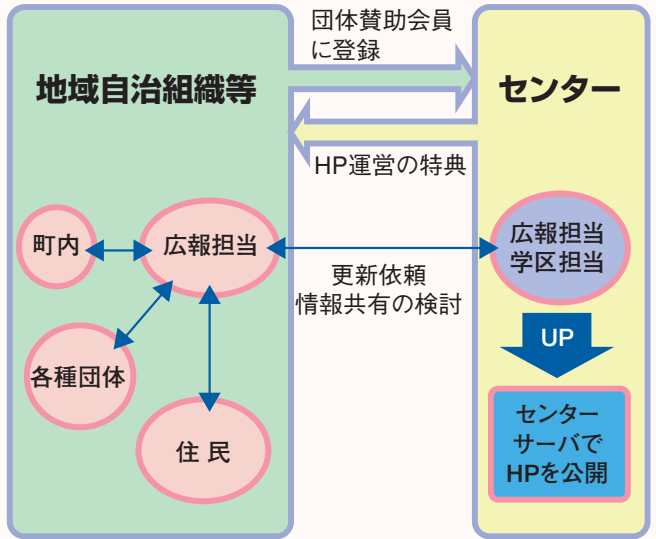
～ 地域のホームページ運営支援 ～

情報通信技術が急速に発展し、「IT革命」などと言われるようになって久しいですが、まちづくりに関わる業界でも、「IT革命」は市民主体のまちづくりへの福音のように言われていました。民主的なコミュニティ運営に不可欠な情報開示や、住民相互の情報共有に、情報通信技術が多いに役立つと期待されていたのです。それから20年程度が経過していますが、現実にはその技術活用はなかなか厳しい状況のようです。

例えば、センターで調べたところ、京都市内の元学区単位の自治組織（自治連合会等）でホームページを作っておられるところは（元学区名で検索をかけました）、現在1割にも満たない状況です。地域自治組織の役員さんにホームページに詳しい人がいないとか、ホームページの制作や更新作業をWeb関連の会社に発注するにも、かなりの費用負担がかかるといったことが、ハードルを高めているようです。地域に担い手がおられてホームページを作っておられる地域でも、日々の更新作業はなかなか大変なようです。ホームページに掲示板を作っておられた地域で、不適切な書き込みが頻繁に行われたことがきっかけで、管理しきれず閉鎖に追い込まれたところもあるようです。

そこでセンターでは、ホームページの設置と運営をお手伝いする事業を立ち上げました。センターの団体賛助会員（年会費5万円）である自治組織に対して、会員特典として、センターのサーバに地域のホームページをアップ、地域から情報を提供いただいて更新作業もセンターで行うというものです。新しくホームページをつくろうという場合、最初の立ち上げと、日常の更新作業が大変なようです。まずは、これをセンターがお手伝いします。

【事業のスキーム】



昨年度、この事業を企画するにあたって、試験的に有隣学区、修徳学区の2学区で自治連合会のホームページを立ち上げました。以下に、2学区のアドレスを記載していますので一度ご覧下さい。



有隣学区 http://kyoto-machisen.jp/chiiki_hp/yurin_HP/yurin_top.htm

修徳学区 http://kyoto-machisen.jp/chiiki_hp/syutoku_HP/syutoku_top.htm

地域の歴史や史跡の紹介、各種団体の取組、新聞掲載記事といった、地域のことがよく分かる情報のほか、自治連合会の紹介、規約なども公開されています。これまで、とすれば地域の中で暗黙のルールのようになっていた地域運営に関する情報も、整理し公開されています。新しく地域の住民になられた方や引越してこようと考えておられる方などに、地域のことを分かりやすく伝えていこうという自治連合会の方の姿勢が表れています。

現在、六原学区のホームページも制作中です。

もちろん、ホームページを立ち上げただけで、劇的に情報共有が進むというわけではないでしょう。ホームページの存在を認知していただくことがまず必要ですし、地域の皆さんのニーズにあわせたコンテンツの充実や双方向のやり取りにWebを活用していくことも大切なことと思われます。センターは、それぞれの地域にあった情報の作り方や、その共有の仕方も、地域の方と一緒に考えてお手伝いしていきたいと思っています。センターでは市民を対象にしたセミナー「景観・まちづくり大学」で、このテーマを扱った講座をご用意しています。

ホームページの立ち上げを考えておられる地域の方は、ぜひ一度センターにご相談ください。(森川 宏剛)



「まちの記憶」を集めて語り合おう！

「まちかどアルバムパネル展」を開催しました

地域の皆さんから寄せられた懐かしい思い出の写真をパネルにして展示する「まちかどアルバム」の取組を、ニュースレター43号で紹介しました。それから1年、「まちかどアルバム」の取組は市内で広がり、5つの地域で実施されました。

そこで、3月11日～24日に、センターワークショップルームで各地域の思い出が詰まったまちかどアルバムを紹介するパネル展を開催しました。



パネル展の様子

六原学区、城巽学区、西陣学区、立誠学区、桃園学区堅神明町の5つの地域から集まったまちかどアルバムには、懐かしい人たちや出来事、知らなかったまちの秘密など、教科書には載っていないまちの歴史や思い出が詰まっていました。

六原学区のまちかどアルバムは、「平成23年3月に閉校する六原小学校の思い出を残そう」との思いもあり、「あのときの小学生はこんなんだなあ・・・」、といった思い出話に花を咲かせながら作っていると、ついつい夜遅くなることもあったそうです。「地域みんなで六原小の思い出を形にして残せてよかった」、そんな声も聞かれました。



写真とともに心に響くメッセージも

また、パネル展に数人で来られた方がまちかどアルバムを前にして、当時の出来事について、長時間話し込まれている姿が

印象的でした。

まちかどアルバムは、決してパネルを作成することだけが目的ではありません。地域の皆さんで声をかけあって昔の写真を集め、懐かしいエピソードやその時代の背景についての思い出を語らいながらパネルを作り上げていく。その過程で、「まちの記憶」とともにこれからのまちづくりを考えるきっかけになればと願っています。

そんな「まちかどアルバム」、あなたの地域でも作ってみませんか？センターがお手伝いしますのでお気軽にご連絡を！

(堀 有輝子)

まちかどアルバムのできるまで

①皆さんで思い出がつまった写真を持ち寄る



②写真を選びながら地域の皆さんでワイワイ座談会



③地域の皆さんの思い出をパネルに表現していく



④完成!!お披露目会



「DO YOU KYOTO? — 千年の持続都市・京都 —」のまちづくり

京都市 地球環境政策監 大島 仁

「千年の持続都市」京都

執務室の見えるところに掲げている、私の好きな写真があります。京都の南の上空から北を俯瞰し、眼下に広がる街とそれを囲む三山の緑を一望できるものです。桓武天皇が「山河襟帯 自然作城」と言い遷都して以来、千年もの間、都としての歴史をもち、今日に至るまで持続して発展し続けてきた都市・京都。いわば「千年の持続都市」である京都を次世代に引き継ぐため、50年100年先を見据えて行っている特徴的なまちづくりの取組を2つ紹介します。

京都の景観を守り育てる「新景観政策」

悠久の歴史の中で育まれてきた京都の景観は、日本の財産です。この財産を守り育てていくため、平成19年9月に大胆な「新景観政策」を施行しました。都心部の建物の高さ制限を45メートルから31メートルにしたほか、建物等のデザイン基準の設定、屋外広告物対策の強化、優れた眺望景観や借景の保全など、50年後、100年後も光り輝く京都を目指して、日本に京都があって良かったと思っていただけるまちづくりを進めています。

「環境モデル都市・京都」としての低炭素社会づくり

平成21年1月、京都市は、国の「環境モデル都市」に選定されました。これに際して本市では、将来も人類が持続可能な社会を構築していくため、温室効果ガスの大幅な削減が必要であることに鑑み、2030年までに1990年レベルから40%削減、2050年までに60%削減の中長期目標を設定しています。

この大幅な削減を図る、低炭素社会に向けた第一歩として以下のシンボルプロジェクトを推進しています。

○自動車利用を抑制して歩行者優先のまちづくりを行い、公共交通機関を活用する「人が主役の道づくり、まちづくりを目指す「歩くまち・京都」の推進

○良好な景観や京町家の知恵と最先端の技術を活かす「景観と低炭素が調和したまちづくりを目指す「木の文化を大切にするまち・京都」の推進

○京都議定書が京都で採択されたことから「環境にいいことしていますか？」という意味で用いられる「DO YOU KYOTO?」を合言葉にして、季節感を大切にす生活、「打ち水」「しまつの心」「門掃き」など伝統的な知恵を生かした、新しい「京都流ライフスタイル」への変革と技術革新に的を絞った、「“DO YOU KYOTO?” ライフスタイルの転換と技術革新(イノベーション)」の推進

「千年の持続都市」の使命

歴史都市・京都の創生を目指す「新景観政策」の取組と、低炭素社会の実現に向け「環境モデル都市・京都」として行う先進的取組。これらによって、50年100年先を見据えたまちづくりに取り組むこと、その取組を国内外に発信していくことが、千年の間持続してきた都市である京都の使命ではないかと考えております。

そして、その2つの取組に関わることでできた私は何という果報者かと、日々喜びを実感しています。



「京の町名とその由来展」

3月11日から24日まで、ひと・まち交流館の1階作品展示コーナーに、京の町名の由来から発想したダイナミックなパネルが並びました。「京の町名とその由来展」と銘打ち、京都市立芸術大学デザイン科1回生(26名)が進級製作として取り組んだ作品の数々です。

この作品作りにセンターは、まちづくりに関するレクチャーするなど昨年度に引き続き協力しました。

今回のレクチャーでは、センター職員がテーマに合わせて京都のまちづくり史や都心部の地域まちづくり活動、地域固有の歴史資源、町名の由来などを説明しました。その後、学生が、下京区の有隣学区と修徳学区の中からそれぞれが担当する町を選び、地域の人達に話を聞いたり、文献を探して、町名の由来を調べました。そして、思い思いに、切り紙や絵の具を使って大型のパネルに、自由な発想で担当する町の様子を描き、作品の解説を加えました。

ある町作品では、江戸時代に住んでいた商人・職人の様子を、またある町作品では、町名の由来となる有名画家の作品と今の町並みのコントラストを描いていました。町によっては、町

名の由来に関する資料が少ないこともあったようですが、そこは描く学生の想像力でイメージを膨らませていました。

見学者の評判もよく、「普段何気なく歩いている町でも様々な時代背景があることがデザインを楽しみながら感じられた」、「作品とその町を見比べて歩いてみたい」、との感想をいただきました。

対象となった両学区の人達の関心も大きく、イベント時に展示していただけることになりました。

今後もセンターでは、学生の自由な発想と行動力をまちづくりに活かせるような取組を行っていきたいと思います。(中島 吾郎)



他都市における景観・まちづくり事例

—札幌軟石がつくるまちの風景—

地域の資源や歴史的景観を活かしたまちづくりの取組の一つとして、札幌での「軟石」による歴史的石造建築の活用を紹介します。

札幌軟石は1870年代初頭、北海道開拓の最中にお雇い外国人としてアメリカから招聘されたトーマス・アンチセルとA.G.ワーフィールドらによって札幌市内で発見されました。加工が容易で軽く、風化や耐火にも強いため、北国である札幌において需要の高い建材となり、家屋や蔵、門塀、墓石など様々な場面で使用されました。4万年前の支笏火山の噴火によってできたという点から考えても、風土や歴史的背景と深く結びついた景観材料であったといえます。

最盛期には年間30万個もの採掘がなされましたが、安価で汎用性の高いコンクリートの登場や、建築基準法制定(昭和25年)による石造建築への規制など、時代と共に状況も大きく変わり、現在は採掘場の数、採掘量ともに激減しました。

しかし、軟石建築の探訪など、自然石ならではのぬくもりある

表情や質感に親しみを持つ人は現在でも多く、札幌建築鑑賞会と札幌軟石文化を語る会では、2005年より合同調査を実施されています。様々な建物用途へのリノベーションも活発化し、かつての郵便局や裁判所が市民のための多目的施設や資料館として、蔵や家屋がカフェ、ギャラリーへと変化を遂げるなど、開拓期より140年経った今でも、まちの各所で石造りの堂々たる姿をみることができます。(木戸 環希)



現在「ばすとかん」の名で親しまれている旧石山郵便局(写真提供:村田林音氏)



● 京町家まちづくりバナナの販売について

センターは、平成17年9月に京町家を保全・再生・活用していくための基金「京町家まちづくりファンド」を設立し、多くの皆さんからのご寄付や団体からの拠出等によるファンド基金を活用して「京町家改修助成モデル事業」を行



協力：生鮮館なかむら

っています。京町家は京都の伝統文化、暮らしの文化を今に伝える京都のまちにはなくてはならない大切な財産ですが、京町家を取り巻く現状は非常に厳しく、毎年約2%の割合で減り続けています。

こうした中、事業の継続と拡大のために、京町家まちづくりファンドの認知度を高め、寄付等にご協力いただける方の拡大を目指して、平成21年5月「京町家まちづくりバナナ」の販売を京都市内のスーパー等で始めました。



▲このシールが目印です

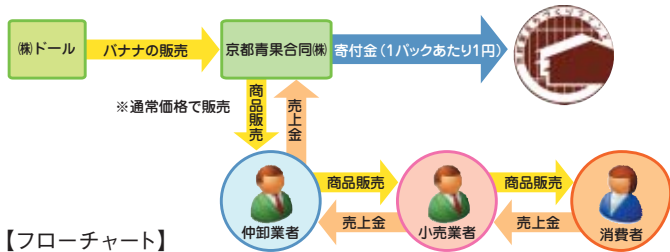
このバナナの販売は、株式会社ドールさんと京都青果合同株式会社さんが、京町家まちづくりファンドを応援しようと、商品購入を通じて消費者の皆さんに参加していただける企画を考えられたものです。バナナ4～5本が入った袋に「京町家まちづくりバナナ」のシールが貼られており、1袋につき1円が、京町家の保全・再生・活用のための基金に寄付される仕組みになっています。

「京町家まちづくりバナナ」には、フィリピンの標高300m以上にある農園でISO9001(品質)やISO14001(環境)などにも配慮しながら栽培された糖度が高く甘みの強いバナナが使用されています。バナナは、価格も手頃で、カロリーも低く、総務省の家計調査でも日本国内で最も食べられている果物です。

ダイエット中の方も朝食を摂る時間がないという方も、バランス良く栄養補給のできる「京町家まちづくりバナナ」を食べて、京町家の保全・再生・活用を応援してください！

(森 広士)

「京町家まちづくりバナナ」取扱店舗(平成21年6月現在)
京都府内の平和堂系列店舗、生鮮館なかむら、スーパー大黒屋



【フローチャート】

「京町家まちづくりファンド」募金箱ワークショップを開催！

4月19日・26日(全2回)

「京町家まちづくりファンド」のことをより多くの方に知っていただき、募金にご協力いただけるよう、今年度から募金箱の設置をスタートしています。

この取組のキックオフイベントとして、伏見区深草の「NPO法人京都・深草ふれあい隊竹と緑」さんにご協力をいただき、4月に募金箱ワークショップを開催しました！

竹と緑さんは深草で竹林整備や竹の普及・活用に取り組まれており、「竹のことならナンデモ来い！」のたいへん頼もしい皆さんです。(くわしくは3頁をご覧ください)。

竹といえば、子どもの頃に貯金箱を作った思い出がある方もいらっしゃるのではないのでしょうか？その昔、江戸時代には深草でつくられていた「深草うちわ」が、京みやげとして人気があったそうです。

このファンド募金箱は、深草の竹林整備の間伐竹を活用しています。切り旬である9月～1月の間に伐採された青竹の表面をむき加工し、1～3ヶ月ほどかけてゆっくりと乾燥させます。こう

することで、割れにくく美しい仕上がりの募金箱の素地ができあがるのだそうです。

竹と緑さんが丹精こめて仕上げたこの募金箱の素地に参加者の皆さんが思い思いの絵付けをし、マイ・募金箱を完成させました。



世界にひとつだけの、マイ・募金箱を作りました。

最初は「むずかしそう…」と思わずつぶやいてしまう参加者の皆さんでしたが、陶器の絵付けをされている山口美春先生をはじめ竹と緑のボランティアの皆さんに楽しく教えていただくうち、いつしかプロの職人さん顔負けの作業ぶりに。

この世にひとつしかない、見事な作品たちが仕上がりました！ファンド募金箱は、これらの作品を置いていただいている所を含め、現在約30カ所に設置されています。ぜひ、ファンドへの募金にご協力をお願いいたします。また、設置のお申し出も随時受け付けておりますので、当センターまでお気軽にお問い合わせください。(大屋みのり)



京町家まちづくりファンドの進捗状況



平成18年度から始まった改修助成モデル事業で改修された京町家は、現在30件となりました。様々な地域にあるこれらの京町家が改修され活き活きと再生されることで、より多くの方々に京都のまちなみや文化について考えていただくきっかけになればと思います。

平成19年度改修助成モデル事業から

小林邸

度重なる改修のため伝統的な意匠が失われていた京町家を再生し、2階を小林さんのお住まい、1階は日本茶販売店「丸久小山園」、奥の離れは京町家宿泊体験施設として活用されています。「大きい丸太のような梁を見つけ、これは壊せないと思い、改修して活用することにしました。」とおっしゃる小林さん。小林さんは京呉服のお仕事をされており、呉服関係の多かったこの地域でこのように町家を活かすことで京都の伝統産業の発展と地域が活性化することを願っておられます。

丸久小山園 西洞院店(中京区西洞院通御池下ル)

<http://www.marukyu-koyamaen.co.jp>

着物ギャラリー&アトリエ善(中京区西洞院通御池下ル善ビル2F)

<http://www.kyoto-zen.com>



改修前



改修後

株式会社庵

株式会社庵では、これまでもいくつかの京町家を再生し、京都らしい住まいと暮らしの体験ができる「京町家宿泊体験施設」として活用されています。今回の改修では、すでに宿泊体験施設として使用されていた町家を伝統的な形に改修して、以前にも増して古き良き京都を体験できる町家として活用されています。中庭に面したアルミサッシを木製建具に変更され、中庭もきれいにされました。

京町家ファンを増やし、京都の伝統文化を継承していく大きな流れにつながっていくようにという思いでこの事業を展開されています。

株式会社庵 恵美須屋町町家(下京区富小路通高辻下ル)

<http://www.kyoto-machiya.com>



改修前



改修後

平成21年度改修助成モデル事業について

2月20日に京町家まちづくりファンド委員会が開催され、昨年の秋にご応募いただいた17件の中から9件が改修助成モデルとして選定されました。上京区5件、中京区1件、下京区2件、右京区1件の計9件で、住居、地域まちづくりを支える拠点、学生のシェアハウスなど、活用の用途は様々です。完成をお楽しみに。

平成21年度活動助成モデル事業について

平成21年度から京町家の保全再生を促す活動に対しても助成を始めました。昨年の秋にご応募いただいた5件の中から関西木造住文化研究会さんの「京町家の改修指針作成に向けた研究—熟練伝統技能者の持つ耐震改修ノウハウに関わる共通則の抽出に関する研究」が選定されました。

オーナーズサロン

京町家まちづくりファンドを活用して町家再生に取り組まれた方々に集まっていただき、基金の拡大に向けた募金箱やまち歩きツアーの取組についてご意見をいただきました。皆様の寄付金で成り立っている京町家まちづくりファンドの事業を続けていくためには基金の拡大が緊喫の課題です。基金拡大に向けた募金箱やまち歩きツアーについて、「募金箱は町家の形がいいのでは」「祇園祭で募金箱を置いてはどうか」「まちあるきツアーはただ歩くだけでなく、テーマが必要」「自転車で回るツアーはどうか」などたくさんのご意見をいただきました。より多くの京町家を応援できるよう、皆様からの貴重なご意見をもとに今後さらに基金拡大の取組をパワーアップしていきたいと思ひます。

(井上 和子)



京町家保全・再生の事例

よろいのや 鎧廼舎うさぎ塾 ―西陣町家工房―



関東から京都へ移り住まれた鎧作家の卯月阿子さんにお話を伺いました。戦国武将のイメージが強い鎧ですが、うさぎ塾では鎧の伝統文化を踏襲しながら、平安期の雅な鎧作りをされています。そのためか、一階部分を工房にしてお住まいの町家には、ゆっくりとした穏やかな時間が流れていました。

卯月さんは関東にお住まいの頃から、京都に来られる機会も多く、京町家に興味をもたれ、「京町家友の会」に入会されたそうです。京都に活動拠点を移すという大きな環境の変化も、ご夫妻のバイタリティーで乗り越えてこられました。まずは「京都西陣町家スタジオ」に工房を置き、その後「京町家情報センター」の紹介で、改修を終えて借り手を探していた築130年の町家に出会われ、「ここに住みたい!」と、即座に入居を決めたそうです。

当初は慣れない町家暮らしに不安もあった卯月さん。しかし、入居されて一年経つと、「屋外に一度出ないと行けないトイレが不安でしたが、今では慣れて、鎧作り教室の生徒さんたちも来られますし、気兼ねなく使っていただけますから合理的だと思います。通り庭の土間も水を流せて気持ちが良いのです。それから、ちょっと小さいなあと思っていたお風呂も窓を開けるとそこには庭が!まるで露天風呂です。」と、楽しい発見がたくさん出てきたそうです。傍からは不便なこともある町家暮らしに見えても、そこには先人の知恵や思いがけない遊び心もあるのだと教えていただきました。また、マンションから木造の建物に移られて、部屋の空気がよくなったとも話されていました。紙と伝統的な京くみひもや京金物を組み合わせて鎧を作っていられるので、昔ながらの町家暮らしに自然とな

じまれたのでしょうか。関東から越して来られた後に分かったそうですが、曾祖母にあたる方は京都にご縁があり、残された日記にも京都の町中の記述がちらほらと。家族に受け継がれた遠い日の記憶から、知らぬ間に京都への愛着を持たれたのかもしれません。

鎧廼舎うさぎ塾では鎧作りを多くの方に伝える活動も活発で、遠方からも生徒さんたちが集まり、町家での鎧づくりに励んでおられます。また、この町家に移られてから、居心地が良いと生徒さんにも好評で、滞在時間が長くなったそうです。今年の5月から6月にかけて開催された「楽町楽家」ではオープンハウスや「都よろい」試着体験も行われました。

自作の庭には、桜守として有名な佐野藤右衛門さんの元で育てられた紅しだれ桜が、昨年末に植えられました。桜の成長も町家暮らしの楽しみのひとつに加わったようです。

(西井 明里)

(紹介)「鎧廼舎うさぎ塾」西陣町家工房

住所 〒602-8224

京都市上京区黒門通一条上ル弾正町738―1

Tel 075-432-2270

URL <http://www.usagijuku.com>



工房に展示されている
手作りの鎧



工房の様子

景都(Kate)のつぶやき

今年の春、家の桜の花がたくさん咲きました。そして、たくさんの実をつけました。今までになく豊作だったので、鳥除けのネットをかけて大切に育てていました。

母は、最初の1粒を孫にとらせようと、実が赤くなるのを待ち続けていました。そして、いよいよその日が・・・しかし、その大事な1粒を鳥にとられてしまいました。ネットの隙間を見つけて、たった1粒の赤い実をとってしまったのです。

近所には、10年くらい前まではもう少し竹林や森がありま

した。でもどんどん開発され住宅などになってしまっています。鳥はエサをとるところが少なくなって、住宅の庭に来ているのだと思います。そう考えると少しは鳥にも分けてあげたいのですが、ネットをはずしてしまったらきっと全滅・・・最後のほうだけ開放しました。

1粒のさくらんぼから、ほんの少しだけ環境について考えることができました。開発されてしまったところを元に戻すことはできませんが、残っている自然を壊さない(汚さない)ようにすることはできるはず。大切に守っていききたいと思います。

(K・M)

私と京都



水野克比古フォトスペース「町家写真館」館長

水野 歌夕

「私と京を繋ぐ町家」

私が住んでいる町家は、かつての西陣織機業地帯のほぼ中心にあたる千両が辻と呼ばれる地域に建っている。明治初期に建ったと言われるこの家は、間口が3間であるのに対して、奥行きは16間ほど、本当に細長く「京の町家は鰻の寝床」と言われるにふさわしい。外観は糸屋格子に虫籠窓で、表の入口から通り庭と呼ばれる土間が敷地の奥まで続き、その通り庭に沿って独立した店の間、玄関の間、次の間、そして座敷が一行に並んでいる表屋造りの町家である。そしてその座敷に面して坪庭がある。

我が家の坪庭は隣家との境の塀と、縁側、廊下、離れの建物(昔は蔵であった)に囲まれた小さな空間である。けれどこの坪庭が町家暮らしにとって大切な場所なのだ。周知のごとく、電気の無い時代から建つ町家は夏を旨として建てられており、坪庭は、通気や採光のための重要な役割を担っている。しかしそればかりではなく、元来の庭は座敷にお迎えしたお客様へのおもてなし、という意味合いも大きく、町家を建てた当時の施主は、作庭にもかなりの心血を注いだようである。それは、町家に今も残る庭石の見事さで容易に判断出来る。当時は重機がなかったのだから、こんなに大きな石を奥の庭に入れるには大変な労力がかかったと思う。きっと母屋の建築にとりかかる前に庭の設計、石の運搬が行われていたのであろう。第一、山や川から町中まで運ぶのも大変な事で、牛が引いて持ってきたという話も聞いた事がある。

縁側に座して鞍馬石の沓脱ぎや白川石の蹲踞、賀茂石の踏み石そして貴船石など京都の山や川の石が、さりげなくしかし何とも言えない配置で置かれているのを眺めていると、この庭が実は京都盆地を模した縮図なのだと気づく。そしてその中に近江の石がぽつんとあったりするの、また京都と近江の関係を象徴するよ

うであり、施主や庭師の粋な意図が見え隠れして面白かったりもする。

落葉を掃き、雑草を抜き、苔の手入れをして水を打つと、鉄分を含んだ花崗岩である鞍馬石の赤褐色に錆びた色合い、賀茂川で採れる賀茂石の青みのかかった深い黒色、深く刻まれたしわの様な筋の入った貴船石の肌が際立つ。水に濡れた石のなんと美しい事か、そんな時、不思議に当時の人々の思いと繋がっていると感じる。差し込む朝日、夕暮れ時の木の間もれの光、急に降り出した雨、先人も私同様、毎日坪庭を眺めては、日々の天候の変化や四季の移ろいを感じていたに違いない。それは市中の家の中に居ながら、坪庭という小さな空間を通して京都の山河、自然と繋がっているという感覚。市中山居を一つの理想とした町家の思いが町家の坪庭には宿っている。

もちろん庭の無い町家もあるだろうし、それぞれの町家が内包するものは多少違う。けれど町家を通して先人の暮らしを想い、ひいては京都の歴史や文化と繋がっているという感覚を、町家に住む人は誰もが感じているのではないだろうか。私にとって町家は、自分の所有物というよりは、先人の暮らしや思いを伝えてくれる存在であり、また次の世代へと大事に受け渡して行くもののような気がする。

新連載コラム 第1回 つれづれ ふっきーの徒然なるままに 「自然との共生―ミツバチに学ぶ―」

少し以前のことになるが、NHK・TVで「アメリカのアーモンド果樹園ミツバチの減少による不作」といった報道があった。この現象は、私たちが取り組んでいるまちづくりの在り方にも重要な示唆を与えているように思うので少し考えてみよう。

そもそも、植物が持続的に生成していくためには、花のめしべの受粉が必要となるが、この受粉、自然界では昆虫に依るところが大きい。私たちは、お花畑を飛び交う蝶の華麗な姿でそれをイメージすることが多いのであるが、最も大きな役割を果たしているのがミツバチだと言われている。それは、ミツバチ自体の数が多いということもあるが、同時に彼らは、自分が食べるためだけではなく何千、何万という幼虫にミツを与えるために、何度も何度も花を訪れるからである。彼らはその行動範囲の中で、群生した自然界のお花畑から、たった数本排気ガスに耐えながら可憐に咲いている路傍の花にま

で、繰返し訪れミツを集めるのである。ミツバチの幼虫は、そのいろいろな花のエキスが詰まったミツを食べて健全に育ち繁殖する。このミツは、本能と自然が織りなす高度なバランス食なのである。

一方、花たちは、繰返し訪れてくれるミツバチによって、安心して次世代の繁栄が期待できるのである。

先のアメリカでの問題は、このような自然界の営みを見無視し、人間の都合の中でミツバチを独占しようとしたことに問題があったのではないだろうか。これでは、ミツバチ自体の生存が危うくなるだけではなく、ミツバチと共存している周りの自然の崩壊をも引き起こすことになりかねない。自然界のルールに人為的な楔を打ち込むとどこかに歪みが出てくるものである。

自然と共生することで自らも繁栄するという広いギブ・アンド・テイクの循環の構造の中で生きるミツバチの本能が、人間からの離脱という行動をとらせてしまったのだとすれば、そして、この現象が最近話題になってきたということを見るならば、私たちは、この現象を自然界からの警鐘として真摯に受け止め、今一度、自然との共生という意味を考えてみる必要があるのではないだろうか。

